

海洋文化館の展示リニューアルから見えてきたもの

大西秀之（同志社女子大学 現代社会学部）

石村 智（国立文化財機構 奈良文化財研究所）

如法寺慶大（南山大学大学院 人間文化研究科）

1. 海洋文化館の展示リニューアルの射程

海洋文化館の性格

海洋文化館は、博物館一般として世界でも非常にまれな施設といえる。というのも、それは、同館が「海の文化」をメインテーマとした人類学・民族学系博物館であるからにはほかならない。

もともと、「海洋」や「文化」それぞれをメインテーマとし、またそれを館名に掲げた博物館施設は、世界のさまざまな国や地域に存在している。ただ興味深いことに、「海洋」と「文化」のふたつを組み合わせ、それをメインテーマにするものとなると、とたんに数が少なくなる。さらには、自文化ならまだしも、異文化を展示の中心とする博物館となると、おそらく世界でも数えるほどしかないだろう。

他方で、海洋文化館には、もうひとつユニークな特徴が指摘できる。それは、展示・所蔵コレクションのほとんどが、1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会の開催にあわせ、短期間で収集された一群の資料によって構成されていることである。その結果として、同館の資料は、1970年代前半の太平洋（オセアニア）地域の「物質文化」をパックした一種のタイムカプセルとなっている。実際、同館の資料のなかには、今日では現地でも目にすることが難しいものが少なからず含まれている。

むろん、著名な人類学・民族学系博物館には、特定の個人や調査隊などが集中的に収集したコレクションが基盤となって開館されたケースが少なからず存在している¹⁾。だが、そうした博物館の多くは、展示・所蔵コレクションを充実させるため、開館後も収集活動を随時続けていることから、必ずしも館の資料全体が一時期のセットのみによって構成されているわけではない。

以上のような特徴を持つ、海洋文化館は、2013年10月11日、実に開館後38年の歳月を経て、展示フロアを全面的に一新しリニューアルオープンした。筆者は、このリニューアル業務に比較的早い段階から関与する、という幸運をえた。そうした経験をもとに、本稿では、今回の海洋文化館の展示リニューアルにおける目的や展望を、筆者が展示アドバイザーとして中心にかかわった「ゾーン1～2」と「ゾーン3」²⁾の考古部門の展示計画から館全体が共有するコンセプトまでを踏まえ提示する。

1) たとえば、草創期に開設された人類学・民族学系博物館として著名なピットリヴァース博物館は、オックスフォード大学に寄贈されたアウグストス・ビット・リヴァース収集の約22,000点のコレクションが基礎となって設立されたものである。

2) 海洋文化館における展示ゾーンの区分と内容に関しては、本誌収録の後藤明による「海洋文化館リニューアルについて」で詳細が記されている。

太平洋地域を知り学ぶ意義

筆者が担当したのは、海洋文化館のなかでは個別の文化や生活実践を展示する部分ではない³⁾。これらのゾーンの展示は、空間軸と時間軸から太平洋（オセアニア）地域を概観し、その地理と歴史を大枠で理解することを目的としている。したがって、ここでの展示は、文化／社会人類学が立脚する民族誌的研究にもとづく内容ではなく、自然人類学、考古学、言語学、自然地理学などの研究成果によって構成されている。

自然人類学、考古学、言語学、自然地理学などと併記してしまうと、どうしても各分野の個別内容の展示が寄せ集められたイメージを抱かれるかもしれない。また、そのイメージは、本館においても部分的には間違いではない。

しかし、筆者らは、研究分野ごとの個別分断的な展示を作るのではなく、太平洋（オセアニア）地域になじみが薄い来館者を想定して、その地理と歴史の概要を伝えるため共通のテーマをいくつか設け、その説明を異なる分野の研究成果を統合しつつ行った。さらには、単に太平洋（オセアニア）地域を知るだけに止まらず、同地域の地理と歴史を学ぶことによって、既存の世界観の再考を促すことも重要な射程に入れていた。

その具体的な例として、ここでは、筆者が企画段階で提起した「3回の大航海時代」というキーワードを取り上げる。このキーワードは、太平洋（オセアニア）地域の歴史を踏まえたとき、西欧近代の幕開けとなったヨーロッパ人による「大航海時代」は人類史上の3回目に数えるべきものになる、という視点の提示である。

というのは、太平洋（オセアニア）地域の歴史は、まさに人類による「大航海」によって切り開かれたものにほかならないからである。まず1回目に当たるのは、紀元前5～6万年前に遡るスンダランドからサフル大陸への現生人類の移動である。スンダランドとサフル大陸の間には、同時期80kmの距離があった、と想定されていることから、この移動は「出アフリカ」後の現生人類による、最初の意図的な外洋への「大航海」だったと認識することができる（後藤 2003:53-63）。次いで2回目に当たるのが、ラピタ文化の進出からポリネシアン・トライアングルに到達する、オーストロネシア語族の拡散である。この拡散は、あまりにも明確な遠洋航海の結果であり、まさに人類史上における「大航海」に数えるに相応しい展開である（後藤 2003:98-112）。

いうまでもなく、こうした太平洋（オセアニア）地域における人類の拡散は、オセアニア研究者や先史人類学者などにとっては基礎的な知識に過ぎないだろう。だが、いわゆる学校教育の「世界史」で学ぶ機会はないことから、一般社会においては極めて疎遠な知識といえる。もっとも、それを人類史上の「大航海」として認識し、西欧近代による「世界史」の語りを相対化しようとする試みは、アカデミズムの場においてもほとんどなされていないのではないだろうか。そういった意味で、「3回の大航海時代」というキーワードの是

3) 民族誌的研究にもとづく展示は、ゾーン3で生活実践を単位とした6コーナーが設けられている。なお、海洋文化館の展示は、個別の地域文化による区分をメインとしていない。

非は置くとしても、それに関する事例は、太平洋（オセアニア）地域の概要を知ることが、世界観の再考を促す可能性を孕んだものといえよう。

これ以外にも、本館の展示では、太平洋（オセアニア）地域の地理や歴史を知り学ぶことによって、既知の世界観が覆される可能性を、ある部分では積極的に、また別の部分では間接的に提示した。たとえば、そのなかには、同地域の統治体制の半数以上が独立した国民国家ではなく、アメリカ合衆国の州・準州、フランスの海外準県、英連邦構成国の領土などであるため、欧米による植民地的状況が残存していることを窺い知ることなども含まれている。このように、太平洋（オセアニア）地域から世界を再認識することも、今回のリニューアルの重要な射程となっている。

沖縄の海洋博公園にある意義

今回の海洋文化館のリニューアル作業では、太平洋（オセアニア）地域を知り理解する意義とともに、もうひとつ重視したことがある。それは、同館が海洋博公園ひいては沖縄県という場に開設された意義を、この機会に改めて問い直すことである。

周知のように、海洋博公園には、現在、沖縄本島中部観光の起爆剤となった「沖縄美ら海水族館」が存在している。同公園には、ほかにも「熱帯・亜熱帯都市緑化植物園」、「熱帯ドリームセンター」、「沖縄郷土村・おもろ植物園」などがあり、大規模な博物館コンプレックスとなっている。

むろん、こうした状況は、直接的・間接的に 1975 年の沖縄国際海洋博覧会の結果としてもたらされたものである⁴⁾。なかでも、海洋文化館は、海洋博の開催時「政府館」として建設・公開された、開催国である日本政府のメインパビリオンであった。

以上のような背景を踏まえ、今回のリニューアルでは、肯定か否定かの判断・評価は来館者個人に委ねるとした上で⁵⁾、海洋博覧会を契機として海洋文化館が開設されたことを積極的に示唆するようにした。このため、海洋博覧会との関連は、この度、一新された展示や解説のなかで明示的にも隠喩的にも随所に窺うことができる⁶⁾。

それにもまして、筆者を含めリニューアル担当者の多くは、海洋文化館が沖縄県に存在し、そこで太平洋（オセアニア）地域の文化を展示する意義とはなにか、という問いを常に念頭に置き作業を進めた。そして、その回答のひとつが、ハワイのホノルルにあるバーニス・P・ビショップ博物館などのように、本館が太平洋（オセアニア）地域の文化セン

4) 博覧会を契機として、自然史系博物館などとともに建設される、という意味では、海洋文化館も、世界中にある人類学・民族学系博物館と同様な背景・由来を持つ、極めてオーソドックスなものといえる。

5) 沖縄国際海洋博覧会が沖縄県に及ぼした影響に関しては、その功罪を含め、アカデミズムのみならず広く社会一般での議論がなされている（e.g. 多田 2004）。

6) こうしたコンセプチュアルな側面のみならず、今回のリニューアルでは、具体的な計画としてスマートフォンなどで、海洋博公園内の各博物館の個別展示を繋ぐような情報コンテンツの整備も将来の構想に入れていた。その構想の一例として、海洋文化館に展示されている漁具が、美ら海水族館で飼育されている特定の魚種を対象としていた場合、それら異なる館の展示が相互に関係していることを、web などのネットワークで来館者に示唆するような解説サービスがある。

ターとして役割を果たすことである。また、この役割は、アカデミズムによる調査研究のみならず、当該地域・社会の文化復興などに寄与することを想定したものである。

こうした射程は、本来リニューアル作業後の展開であり、直接的には展示やフロアの改修には関係ないように思われるかもしれない。だが実際には、そうした役割は、博物館である限り、展示や所蔵資料などによって果たすべきものである。またそうでなければ、なにも博物館でなくとも、その役割は大学や研究機関などでも構わないことになってしまう。とすれば、海洋文化館が太平洋（オセアニア）地域の文化センターとしての役割を果たしうるには、それに足る展示や所蔵資料などを備えていることが必須条件となる。

そういった意味で、今回のリニューアル業務の一環として行われた、ポロワット島でのカロリン諸島型航海カヌーの製作とグアムまでの外洋航海は、その代表的な事例となるだろう。実際、これにより、海洋文化館は、カヌー本体そのものから製作工具までの実資料と膨大な映像記録を収集することができた。そしてそれらは、本館の展示と所蔵資料をもたらしただけでなく、将来、当該地域にとっても貴重な文化資源になる可能性を秘めている。というよりも、そうなるようリニューアル作業では、克明かつ詳細な映像記録を取り、その意義を伝えるべく展示の趣向を凝らした。

もっとも、その成否は、今後の海洋文化館の活動に委ねるしかない。とはいえ、そうした評価は、あくまでも「海と文化」をテーマとした博物館施設として活動した結果得るべきである。とすれば、同館が果たすべき役割は、なによりもまず来館者の知的興奮を刺激し、沖縄を含めた太平洋（オセアニア）地域の文化を育んだ「海の世界」に関する学びを、あくまでも展示によって促す必要があるだろう。またそれこそが、周囲を「美ら海」に抱かれた沖縄に相応しい、博物館施設としてのあり方ではないだろうか。

（大西秀之）

2. 知のアップデートとしての展示リニューアル 最新の研究成果を紹介

「博物館入り」という言葉がある。大体の意味はご推察の通りだが、決して良い言葉ではない。しかし世間における博物館のイメージはこのようなものが主流であることも否めない。だが本来の博物館の役割は、その時代における知の到達点を示すものでなくてはならない。そのためには、内容は常にアップデートされる必要がある。

今回の海洋文化館のリニューアルは、まさに知のアップデートにふさわしい内容であったと、展示アドバイザーの一員として自負している。特にオセアニアにおける人類拡散に関する一連の展示（ゾーン2）は、最新の研究成果をわかりやすい形で紹介した好例といえる。

しかし実際にこのテーマを展示コンテンツに仕上げるのは思いのほか難しかった。まず、海洋文化館は考古学系の博物館ではないので、出土遺物などの展示物に頼ることができなかった。さらに、考古学とともに重要な研究領域である形質人類学と言語学についても、

その成果を展示コンテンツとして直接的に表現するのは難しかった。

そこで私たちが採用したのは、展示スペースの一面に「人類学者の書齋」を再現することだった。そこではあえて考古学・形質人類学・言語学と研究領域ごとに区分するのではなく、それらを総合的に研究する「人類学者」を想定し、こうした学際的研究の共同によってオセアニア人類史の研究が進められてきたことを表現した。

このコーナーでは常時、ビショップ博物館の篠遠喜彦博士のインタビューを収録したビデオ・プログラムが流されている。もちろん、この書齋の主が篠遠博士だと直接的に示しているわけではないが、観客が「人類学者」をイメージするうえでこれほど適した人物は他にいないだろう。加えて、欧米の研究者の字幕入りインタビューではなく、日本人研究者の口から語られることにより、観客に親近感を持たせ、日本人がオセアニア研究の進展に果たした役割の大きさをアピールすることができると思う。

マルチメディアと実物

考古学・形質人類学・言語学の研究内容については、パネル展示に加え、マルチメディアを活用し、タッチパネルによるインタラクティブなコンテンツを充実させた。例えば言語のコンテンツでは、国立民族学博物館の菊澤律子教授の監修のもと、門田修氏が各地で収集してきた基本語彙の発音の録音データをもとに、ある単語が地域によってどのように発音されているかを示したものがある。具体的には、例えば「目」という単語を選び、次に地図上に表示された地域のうちのひとつをタッチすると、その地域における現地語の発音が音声として再生されるというものである。それにより、距離が離れていてもよく似た発音の単語がオセアニア一帯に分布していることを直感的に示すことができた。タッチパネルという手法は比較的新しい展示手法ではあるが、スマートフォンやタブレット型端末の急速な普及を背景に、来館者にもさほど戸惑いを感じさせない、むしろ親しみやすい手法といえるだろう。

また門田氏・宮澤京子氏らの手による映像も、今回のリニューアルにおける見どころのひとつである。人類拡散のコーナーでは、オセアニア各地の遺跡の撮りおろしの豊富な映像コンテンツが取り揃えられており、なかでもラピタ土器の発掘現場の様子を撮影したものは、こうした映像コンテンツとしては珍しく、新しい試みではないかと思う。門田氏はこれまで長年にわたって民族誌的なドキュメンタリー作品を数多く手がけてきたが、やはり考古学の内容を表現することについては苦勞されたようである。「動きのある」民族誌的映像に対し、考古学の内容は基本的に「動きがない」ため、本来、映像作品としては不向きであると思われてきた。しかしここでの映像を見ると、写真や図面では表現しにくい遺跡の「横の広がり」が表現されており、観客に臨場感を伝えるには十分な内容になっていると感じられることだろう。また実際に遺跡を発掘する様子を見せることにより、観客は研究者の思考のプロセスをたどることもできる。その意味で、篠遠博士のインタビュー映像も同様の役割を果たすだろう。

一方で博物館ならではの实物展示の充実にも力を入れた。このゾーンでは、2点のラピタ土器がシンボリックな展示物となっている。これはニューカレドニア在住のジャン＝ピエール・シオラ氏の手による、およそ3,000年前のラピタ遺跡から出土したものの精巧なレプリカである。ちなみに国立民族学博物館および国立科学博物館に展示されているラピタ土器も同じくシオラ氏の手によるものであるが、モデルになった土器がそれぞれ異なるので、興味がある方はそれぞれを見比べられると面白いだろう。实物の考古資料を提示できないという制約はあるものの、博物館の最大のセールス・ポイントは「モノを見せる」ということに尽きると考える。この博物館の見どころであるカヌーの展示ともども、モノの持つ迫力を観客に感じていただければ、と思っている。

センス・オブ・ワンダーへの挑戦

この海洋文化館の展示は必ずしも「わかりやすい」展示にはなっていない。もちろん全体の展示を見渡すと、バンドデシネ（イラストによる物語仕立て）の手法を活用したり、大型スクリーンによる映像を活用したりと、「わかりやすい」工夫は十分になされている。しかしその扱っている内容は学問的な専門性も高く、それは決して「わかりやすい」内容ではない。解説に用いられている用語も、どうしても平易な言葉で置き換えることが難しいものもあった。しかしあえて観客に「勉強」する余地を残しておくことは、結果的には観客に充実した博物館体験を提供することになるのではないかと考える。つまり観客の「センス・オブ・ワンダー」を刺激するには、観客に「媚びた」展示にするのではなく、むしろ学問のゴリゴリに硬派な部分もあえて見せるということも必要ではないかと考える。この海洋文化館の新たな展示は、そうした要求に十分応えるものになったと自負している。その成否については、諸賢による判断を仰ぐこととしたい。

(石村 智)

3. 海洋文化館の整理・修復作業を通じて

はじめに

2013年10月11日、ついに海洋文化館がリニューアルオープンした⁷⁾。同館のリニューアルに先立って、その収蔵資料は整理・修復作業が行われた。一般にはこれらの作業は、博物館業務のなかでも裏方作業として捉えられがちであるが、それは重要度が低いという意味では決してない。「縁の下の力持ち」というべきこれらの作業が機能しなければ、展示や教育といった表舞台も機能しなくなるだろう。筆者は幸運にも海洋文化館の裏方作業を経験する機会を得ることができた。本稿ではこの裏方作業を経験した身として、そこから得られた知見と、今後の海洋文化館に期待する展望を提示していきたい。

7) 海洋文化館のリニューアルオープンに向けた経緯、コンセプト、各展示ゾーンの内容などは本誌収録の後藤明、大西秀之、石村智によって詳細に記されている。

整理作業

海洋文化館所蔵資料の整理作業は 2007 年 9 月より、南山大学人文学部人類文化学科教授である後藤明氏が中心となり行われた。それには当時のフィールドワーク実習を受講した学生、また協力者となる研究者や同館の職員が参加した。この整理作業の主な目的は、展示ホールおよび収蔵庫、倉庫に収集されている資料と台帳（通称ピンクファイル）との照合、写真撮影、保存状態調査であった⁸⁾。筆者はこのときはフィールドワークを受講していなかったため参加していない。筆者が参加することができたのは次回の 2008 年 2 月からであった。作業を進めていくなかで都市植物園の収蔵庫に一部の資料が移動されていたことがわかり、それも含めて調査を行った。調査の結果として、それまで混乱していた資料情報を集積・精微化したデータベースの一応の完成を見たのは 2010 年の年度末であった。このデータベースは、のべ 2 年半もの月日をかけた作業者たちの苦勞の結晶ともいえるものである。

筆者たちが調査を進めていくなかでさまざまな問題に直面することになる。例えば、一部の資料が行方不明であったり、現状の資料と台帳記載の情報との齟齬が生じることもあったり、また、写真撮影一つをとっても簡単にはいかない場面に出くわすことがいくつも生じた。資料ごとに収蔵状況は多様なため、さまざまな問題が持ち上がることもしばしばであり、解決するためには地道な作業の連続であった。

整理するなかで行われた資料の保存状態調査も今後の修復や展示プランを考えるうえで重要なものである。一口に民族資料といってもその大きさ及び素材も多様なものが収蔵されている。したがって、破損状態を判断することは資料ごとに注意深く観察する必要がある。それは慣れない筆者にとって難しい作業であったが、同時に博物館資料の保存という興味深いトピックとの出会いでもあった。作業としては資料ごとの破損の有無だけではなく、その程度と箇所を観察し記録していくことになる。こうした作業が今後の展示プランの構想だけではなく、収蔵・整理・保存・研究及び活用など博物館として必要不可欠な機能へとつながっていくはずである。

修復作業

整理作業だけではなく、その後元興寺文化財研究所による資料の修復事業も進められていった。2009 年度より修復計画事業、2010 年度から 2011 年度末にかけて修復作業が行われた。このときの対象は、先の整理作業によって修復が必要であると判断された資料群である。オセアニア各地のカヌー（タヒチのダブルカヌー、トロブリアンド諸島のクラカヌー、パプアニューギニアのラカトイカヌーなどの大型カヌー）やその他の大型資料は、研究所への移送が困難なため現地作業となった。また、移送可能な小型資料は研究所へ持ち帰り処置が施された後、海洋文化館に戻された。このような事情のため業務年度中は数

8) この一連の整理作業及びナンバリング作業に関する詳細な記録は長谷川の報告にある（長谷川 2012）。

度にわたっての作業計画が立てられ、筆者は 2011 年 2 月より現地修復作業に参加している。

修復作業は主にクリーニング、補填、補彩、防腐・防カビ剤の塗布などが行われた。修復は、保存科学分野における現状維持の理念⁹⁾のもとで行われており、現在の資料状態をできるだけ崩さずに保存していくことに努めた。それは経年劣化しているとはいえ 1970 年代前半に収蔵された資料の状態を維持しようとするものである。オセアニア地域の民族資料は基本的に貝や木材、土、樹皮や葉などの有機物から構成されている。仮に、屋外で風雨に晒されていれば徐々に腐敗が進み、最後には土にかえってしまう素材を多く含んでいる。そのため、たとえ屋内であっても時間が経てば素材自体が劣化し脆くなってしまう。そういった資料を扱う修復には細心の注意が必要であった。

クリーニングは主に資料に溜まったホコリなどの汚れを取り除いていくことを指し、脆くなっている木材や細かい細工物はそれ以上破損することがないように細心の注意を払う必要がある。

整理事業によって 1975 年設立当時の展示手法による不具合が見つかることがあった。今回の修復は、そういった不具合によって発生してしまった破損に対して行われる処置も重要なものとして捉えられている。そして、たとえそのような破損が見つかって、資料自体の形態を崩すことなく補填・補彩を施すことに努めた。

設立当初から展示されていることで資料自体もかなり傷んでいる場合もある。そのなかには資料の形態上・構造上の細部が脆く崩れる可能性が高い、もしくは現時点ですでに外れてしまった部分もあった。資料にそのような破損を見つけた場合は、その部位を元の位置に戻すように努めた。例えば、船体に使用されている木材の樹皮は乾燥するとめくれて外れてしまいそうなものがあったのだが、その部分は極力、元の位置に戻るよう努めて直すことになった。また、大型カヌーのなかには船体側面の板を接合する構造をもつものがあり、その継ぎ目の部分には浸水をくい止めるために樹液や石灰のセメントなど詰められるのだが、これが外れている場合もある。この塊が外れた箇所を特定するのは困難であったが、元の位置に戻すように努めた。こうした処置は展示によって視覚的に目立つ部分だけではなく目立たない箇所にも施されている。

葉や樹皮などの有機物は乾燥すると非常に脆くなり、これらの素材で構成されている部位や道具は少しの衝撃ですぐに破損につながるため、かなり慎重に作業にあたる必要がある。こうした資料はその素材自体を強化して、それ以上脆くなってしまうことを防ぐ必要があった。また、彩色が施されている資料は、その彩色が剥がれかかっているものが確認でき、その状態を直すために彩色による着色に変化は起こさせずに、なおかつその部分が

9) 保存科学分野における修復は、修理や復元といったものとは根本的に違う理念のもとで行われる。修理の場合は壊れている箇所を新調し取り替えることも可能であり、復元の場合は資料の失われた箇所であってもさまざまな考証のもとで過去の姿に戻すこともできる。しかし、ここで行われた修復はそのような行為ではない。現状の形態とともに資料に残された使用痕など、人々がどのように生活し伝えてきたのか、という痕跡を含めて、資料の現状を維持するための保存処理となる（増澤 2002: 232-248）。

剥がれないように強化する処置が施された。

以上は非常に簡略的な修復作業のまとめとなる。これらは作業自体の一部でしかなく、その背後ではかなり大掛かりな作業も行われている。例えばダブルカヌーなど大型カヌーの底面の作業である。地面に接している底面に修復処置を施すためには、船体自体を持ち上げる必要がある。そのジャッキアップの作業は専門家数名によって行われたが、はたから見ている筆者はまさに職人仕事と思って感嘆したものであった。

さて、このように海洋文化館の資料は現状維持の理念のもとで保存処理が施されていった。それは古くなったものを新調するような類の行為ではなく、経年劣化しているとはいえ、1970年代のオセアニア地域の貴重な資料をできるだけ現状を維持する形で保存することに努めたものであった。このような保存処理は海洋文化館の資料を後世に伝えていくためには必要不可欠なものである。

おわりに—海洋文化館、学びの場としての展望—

このように海洋文化館の資料はリニューアルに先立って整理・修復作業が施されている。これらの作業は単に目の前のリニューアルという一大事業のためだけに行われたのではない。これが本当に意味を成すものとして機能してくるのはその先、これからの未来にあるだろう。今後、海洋文化館が博物館施設として活動し、オセアニア社会へつながる文化交流の場として社会へ貢献するためには、今回の作業は必要不可欠なものであったと考えている。

資料を整理・保存するということは一時的な場しのぎ的なものではなく、資料が将来的に果たす役割をも念頭に入れておく必要があるのではないだろうか。海洋文化館は1970年代前半のもはや現地でも見ることができない資料群が収蔵されている奇跡的な場所である。これらの貴重な資料を保存することは単に後世に残すということだけではなく、これから先資料が何らかの形で活用される機会がつけられた、という意味をも含んでいるのだ。それはオセアニア社会との文化交流として、また当該地域の文化復興運動として、さらには研究者の学術資料として活用される機会であり¹⁰⁾、そのように活用されることで資料の保存から、資料の更新へとつながっていくのではないだろうか¹¹⁾。このように交流し、活用され、更新されることで海洋文化館は人々の「海洋文化」への学びの場となっていくだろうし、博物館施設としての意味をもつのであろう。

今回のリニューアルに伴って保存処理を受けた資料がいかに活用されていくのか、それは今後の海洋文化館の活動次第である。筆者としては是非のその門戸を開いて、多くの人々が行き交い、資料と触れ合うようにしてもらいたいと願う。海洋文化館を学びの場として、なにより楽しむ場として、多くの人に訪れてもらいたい。もしかしたら、なんだか

10) 筆者自身の研究では、海洋文化館に収蔵されているパラオ共和国のコトラオルカヌーを研究対象としている。このカヌーの実測図などの記録及び考察は、筆者の修士論文にある（如法寺 2013）。

11) ここでいう資料の更新とは、例えば資料に関する新たな研究成果が補完される、または資料が活用されることで新たな文化的交流が生まれる、など、学術的にも文化的にも新たな意味が補完されるということである。

わからないモノに戸惑うかもしれないが、そのときにはぜひご自身のお気に入りのモノを探してほしい。きっと皆さんのところを刺激するようなモノがそこには待っているはずである。

(如法寺慶大)

参考文献

後藤 明

2003 『海を渡ったモンゴロイド：太平洋と日本への道』、講談社。

長谷川真美

2012 「博物館・整理作業におけるモノとヒトの民族誌——海洋文化館とその資料の足跡を追う」、南山大学大学院人間文化研究科修士論文（未公刊）。

増澤文武

2002 「民俗文化財」京都造形芸術大学『文化財のための保存科学入門』、角川学芸出版、pp.232-248。

如法寺慶大

2013 「コトラオルカヌーとは何か？——パラオにおけるコトラオルカヌーのカテゴリーに関する物質文化研究」、南山大学大学院人間文化研究科修士論文（未公刊）。

多田 治

2004 『沖縄イメージの誕生：青い海のカルチュラル・スタディーズ』、東洋経済新報社。